第５課　その日を呪いなさい

【暗唱聖句】

「主よ、わたしたちの神よ、あなたこそ、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方。あなたは万物を造られ、御心によって万物は存在し、また創造されたからです。」黙示録4:11

【今週のテーマ】

ヨブはなぜ苦難が次から次へと襲い来るのか、神とサタンとのやり取りなど知る由もありませんでした。しかし、わたしたちも日々の生活の中で遭遇する苦難の理由はわかりません。しかも、神に忠実な生活をしているにも関わらず苦難が来ることもあるのです。

【日曜日　その日は消え失せよ】

「やがてヨブは口を開き、自分の生まれた日を呪って、言った。わたしの生まれた日は消えうせよ。男の子をみごもったことを告げた夜も」ヨブ記3:1～3

ヨブは大きな苦難の中でサタンが主張するように神を呪うことはしませんでしたが、自分が生まれてきたことを呪いました。この世に生まれなければ、このような悲しみや苦しみを味わうことはなかったという思いです。わたしたちもこのような思いに捕らわれたことはないでしょうか。しかし、わたしたちは誰一人として意味もなく、偶然生まれてきた人はありません。すべての人は神のご計画によって生まれてきたのです。だとするならば、襲い掛かる苦難を超えた喜びと幸福が待っているに違いありません。まだ、誰も見たこともない未来が、生まれてきて良かったと心から思える未来が待っているに違いありません。

【月曜日　墓の中での憩い】

問１

「なぜ、わたしは母の胎にいるうちに／死んでしまわなかったのか。せめて、生まれてすぐに息絶えなかったのか」ヨブ記3:11

ヨブは自分が生まれた日を呪い、死んでしまったほうが良かったと嘆きます。その理由は死ねば安らぎを得られるからだというものでした。

「そこでは神に逆らう者も暴れ回ることをやめ、疲れた者も憩いを得、捕われ人も、共にやすらぎ、追い使う者の声はもう聞こえない。そこには小さい人も大きい人も共にいて、奴隷も主人から自由になる」ヨブ記3:17～19

この世の生活に疲れてしまったとき、人は死ぬことを願ってしまうことがあります。それは楽になれると思うからです。死後の世界がどのような世界かはわかりません。しかし少なくとも今の苦しみからは解放されます。それで十分と思うのです。ヨブはまさにそのような心境だったのでしょう。このように死にたい、苦しみから解放されたいと願っている人に対して、「これからもっと良いこともあるよ」とアドバイスを送ることも多いのですが、しかし今の苦しみから解放されるわけではありません。共に涙を流しながら、主がいまその人を慰めてくださるように祈りしかありません。またヨブは、死を願っても死は来ないと言います。

「彼らは死を待っているが、死は来ない。地に埋もれた宝にもまさって死を探し求めているのに」ヨブ記3:21

この言葉は黙示録9:6を連想させます。「この人々は、その期間、死にたいと思っても死ぬことができず、切に死を望んでも、死の方が逃げて行く」（黙示録9:6）。まるで、ヨブは黙示録に描かれた世の終わりの裁きを体験しているかのようです。

ヨブの言葉の中で気になるのは気になるのは3章25節のみ言葉です。

「恐れていたことが起こった。危惧していたことが襲いかかった」ヨブ記3:25

ヨブが常に子供たちの身を案じていたことがわかります。ヨブ記1章5節では、「この宴会が一巡りするごとに、ヨブは息子たちを呼び寄せて聖別し、朝早くから彼らの数に相当するいけにえをささげた。「息子たちが罪を犯し、心の中で神を呪ったかもしれない」と思ったからである。ヨブはいつもこのようにした」と書かれてあります。これらの言葉から想像できるのは、ヨブの子どもたちはヨブほどのは神に対して無垢で従順ではなかったのかもしれません。

わたしたちも自分の子ともの歩みが神に御前に正しくないことがわかると、心配になることがあることでしょう。そのために毎日祈ることでしょう。最終的には子ども自身の問題なのですが、ヨブの気持ちがわかるのではないでしょうか。

問2

「生きているものは、少なくとも知っている、自分はやがて死ぬということを。しかし、死者はもう何ひとつ知らない。彼らはもう報いを受けることもなく、彼らの名は忘れられる」コヘレト9:5

「こうお話しになり、また、その後で言われた。「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。」ヨハネ11:11

死の状態は、この世のことは何もわからなくなる状態です。だから、苦しみも悲しみもありません。イエスは死を眠っていると表現しました。ヨブは苦難から解放されるために死を願いました。確かに、死ねばこの世の苦しみから解放されるわけですが、死ぬときは神のみ手にあります。また死後の裁きもわすれてはなりません。

【火曜日　ほかの人達の苦痛】

「わたしの苦悩を秤にかけ、わたしを滅ぼそうとするものをすべて天秤に載せるなら、今や、それは海辺の砂よりも重いだろう。わたしは言葉を失うほどだ」ヨブ記6:2、3

ヨブの苦しみを、海の砂よりも重いと比喩を用いて表しています。どれほど苦しかったかが伝わってきますが、それでもわたしたちはヨブの気持ちをすべて理解することはできません。その人が受けている苦しみは、その人にしかわからないからです。しかし、その苦しみをすべて理解してくださる方がおられます。それはイエス・キリストです。だから、多くの人の慰めや励ましの言葉は必要なものですが、最後はイエス・キリストに目を向けて初めて救われるのです。

【水曜日　はたのひ】

「メトシェラは九百六十九年生き、そして死んだ」（創世記5:27）。

聖書に記録されている最高年齢は969歳まで生きたエノクの息子のメトシェラです。約1000歳近く生きたわけですが、それでも永遠という時間と比べれば、取るに足らない時間であり、死に直面したとき人生のはかなさ、短さを嘆いたことでしょう。

「わたしの一生は機の梭よりも速く、望みもないままに過ぎ去る」ヨブ記7:6

ヨブは苦難の中で、人生が早く終わればよいと言いながら、同時にここでは人生はあっという間に過ぎていくと言っています。人生は苦難に満ち、同時にはかなく過ぎていく、そこに意味や価値を見出すのは難しいという気持ちが表れています。

【木曜日　人間とは何なのか】

「人間とは何なのか。なぜあなたはこれを大いなるものとし、これに心を向けられるのか」ヨブ記7:17

ヨブは人間とは何なのかといっています。これは詩篇8:5を想起させます。

「人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは」詩篇8:5

しかし、その意味するところは全く違っていました。詩篇の記者は神の偉大さを称えたうえで、その偉大なる神がこのようなちっぽけな人間に目をとめてくださることに驚き、人間とは何ものなのかと感動しているのに対して、ヨブは人間に苦しさのあまり、それが神から来ているのだと思い、なぜ目をとめられるのか、ほっといてくれと言っているのです。

「朝ごとに訪れて確かめ、絶え間なく調べられる。いつまでもわたしから目をそらされない。唾を飲み込む間すらもほうっておいてはくださらない。人を見張っている方よ。わたしが過ちを犯したとしても、あなたにとってそれが何だというのでしょう。なぜ、わたしに狙いを定められるのですか。なぜ、わたしを負担とされるのですか」ヨブ記7:18～20

しかし、詩篇の記者にしても、ヨブにしても、神を思うとき、これほど神の関心の対象である人間とは何ものなのかという思いは変わりません。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」ヨハネ3:16

「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです」第一ヨハネ3:1

わたしたち人間が何ものなのかということについての答えがあります。それは神が御子の命をお与えになるほどに愛されているということ。神の子と呼ばれるほどに愛されているとうことです。だから、何が人生に起ころうとも、すべて神の子として愛されている中で起きていることなのだと信仰で見つめ、信じていくことが大切なのです。